『広島平和科学』34 (2012) pp. 61-91 ISSN0386-3565
Hiroshima Peace Science 34 (2012)

丹下健三による「広島平和公園計画」の構想過程

千代　章一郎
広島大学大学院工学研究院
広島大学平和科学研究センター兼任研究員

Planning Process of *Hiroshima Peace Park Project* by Kenzo Tange

Shoichiro SENDAI
Institute of Engineering, Hiroshima University
Affiliated Researcher, Institute for Peace Science, Hiroshima University

SUMMARY

This paper aims to elucidate the planning process of Hiroshima Peace Park Project (1950) as the core of the city by Kenzo Tange (1913-2005) in the postwar reconstruction period. In addition to Peace Memorial Park in the Nakajima district, he planned the

cultural complex in the Motomachi district connected the Nakajima district by the axis through the Atomic bombed Dome. However, Tange realized only Hiroshima Children's Library in the Motomachi district. In this process, he created the unique notion of the 'factory of the peace' and took the local opinions for the children's facility into consideration at the same time. In the case of Hiroshima, the external and the internal factors are integrated in the conception of the city planning by Tange.

1．はじめに

第二次世界大戦後の広島における丹下健三（1913-2005）の活動は、1949 年 7 月「広島平和記念公園」の設計競技に当選し、平和記念公園が実現したことで知られている。しかし、構想のうちで当初実現に至ったのは慰霊碑（1952）、陳列館（1955）、本館（1955）等の建物で、公園の園地整備は広島市によって実施され、また白土設計事務所による新広島ホテル（1955）が公会堂とともに公園に組み込まれるなど、全てが丹下健三の手によって実現したわけではない。一方で、丹下健三は当選直後の 1950 年に、中島地区にある「広島平和記念公園」（後に丹下健三自身は「広島平和会館計画 PEACE HALL PROJECT」としている）を原爆ドーム北側の基町地区にも拡張した「広島平和公園計画 PEACE PARK PROJECT」を策定し、さらにその一区画を「広島児童センターCHILDREN'S CENTER」として基本計画図を作成している。丹下健三はこれらの一連の構想をまとめて、「廣島計画 HIROSHIMA PLAN　平和都市の建設」として発表している[1]。そこでは、中島地区と基町地区の「平和公園計画」案は「平和都市の建設」という大きな都市計画構想の「一断面」[2]とされる。この「平和公園計画」は後に、丹下健三において「都市の建設のコア」[3]と呼ばれるべきものであり、戦後復興期におけるモダニズムの都市的意義を象徴的に示しめしている。

しかしながら、「平和公園計画」では、基町地区に関する限り、唯一「広島市児童図書館」のみが実現に至る。それ以外、第二次世界大戦後の基町地区の復興整備に関して、直接的に丹下健三が関与することはなかった。それゆえに、丹下健三が「平和都市の建設」として構想したものは、中島地区の「平和記念公園」の構想のみで解釈され評価されてきた。そこで本稿は、「平和公園計画」という丹下健三の全体的な構想をした場所を通して、「平和都市の建設」の構想過程を復元し、その「都市のコア」について考察することを目的とする。

資料としては、丹下健三の作品集、作品掲載雑誌、及び広島市公文書館に所蔵されている資料である。さらに「児童図書館」の後継施設である広島市こども図書館に保管されている資料を用いる。

分析の方法としては、丹下健三による「平和記念公園」の以前の都市計画的

な研究から、「平和記念公園」、「平和公園計画」、「児童センター計画」へと至る一連の計画・設計を分析することによってその仮想の都市空間を復元し、「平和公園計画」の都市空間的なデザイン手法（すなわち「都市のコア」の意味）について考察する。

戦後復興期の広島における丹下健三の建築・都市計画については、石丸紀興による多くの研究成果がある。なかでも、丹下健三と「平和記念公園」設計競技以前の復興都市計画との関わりについて、土地利用計画から考察した研究[4]や、公園緑地計画に焦点を当てた研究[5]がある。そして、その後の丹下健三と平和記念都市計画についてその制度史に焦点を当てた研究[6]、その計画思想の形成に関して設計競技の計画・設計条件についての研究[7]がある。さらに、平和記念公園計画以後について、その中心施設である「広島平和記念館」の形成過程と改修計画についてまとめた研究[8]や、戦後広島での丹下健三以外の建築家の活動について、「広島児童文化会館」を設計した暁設計事務所についての研究[9]がある。

これらの研究は、都市史的文献研究として極めて貴重な成果である。それに対して本稿では、これまで主題的に研究されていない基町地区を含む「平和公園計画」に焦点を当て、都市計画構想が練られていく過程を空間論的な分析によって明らかにしようとするものである。

２．広島戦災復興都市計画への参加[10]

1946 年 9 月から 10 月にかけて、広島市復興局による「廣島復興都市計画図」が作成されているが（図１）、この時中島・基町地区は中島公園・中央公園として土地利用が計画されている[11]。その後に丹下健三は、戦災復興院嘱託として広島復興都市計画のための基礎的調査と土地利用計画に参加するために 1946 年 11 月に来広する[12]。1947 年 2 月に丹下健三は土地利用計画案を広島市復興局へ答申し、道路計画、緑地計画、用途地区について提案を行っている。この時、丹下健三は中島・基町地区を一体として、市庁舎・市民のコミュニティ・センター（公会堂、図書館、原爆資料室）を提案した、としている[13]。

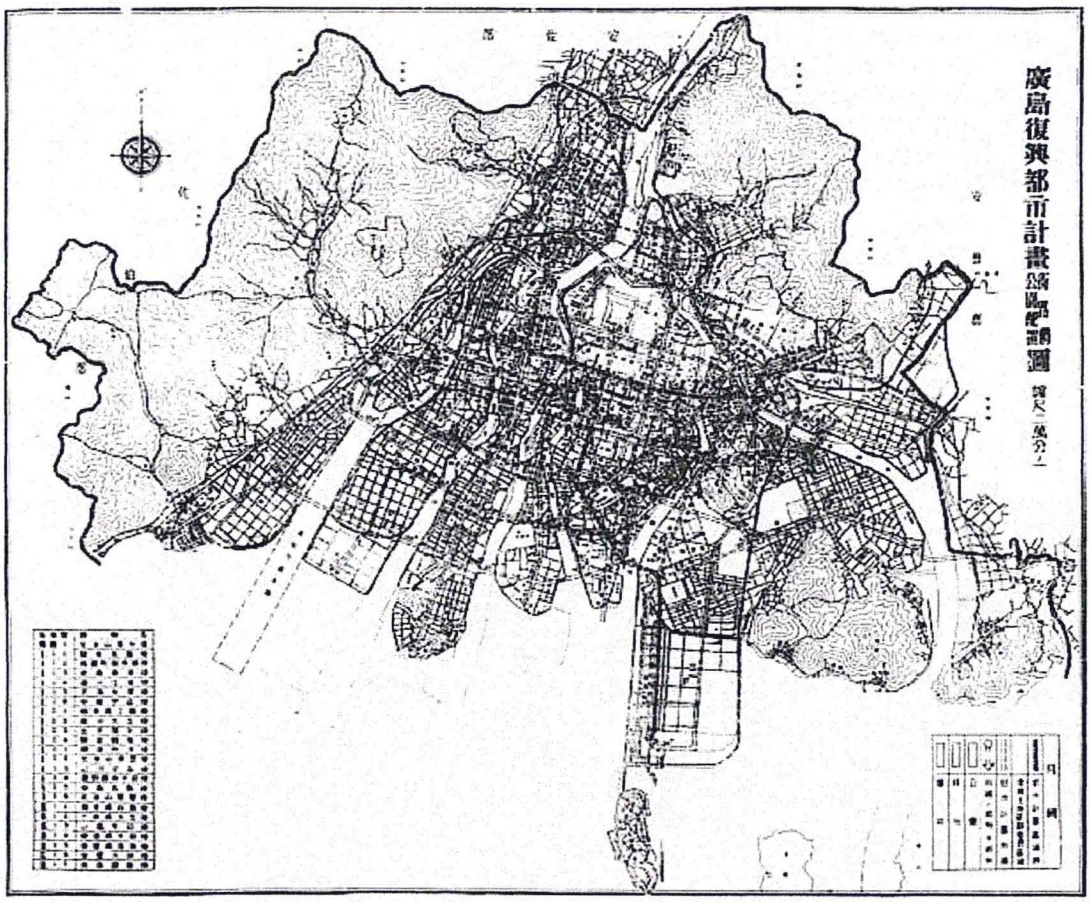


図１　広島市による復興都市計画図（1946）[14]

その後、1949 年に広島市によって作成された土地利用計画図と比較してみると、中島地区と基町地区はすでに 1946 年の「廣島復興都市計画図」で大公園として指定されていたものを踏襲している[15]。つまりそれは、旧市庁舎がそのまま利用されることが決定的となったことで、丹下健三のコミュニティ・センターの提案が市の復興審議会によって否定されたことを意味する。

広島市以外で丹下健三が関わった戦災復興都市計画と広島での戦災復興都市計画を比較してみると、丹下健三が中心的役割を果たしたのは広島と稚内の二つであったことが、藤森照信によって明らかにされている[16]。

稚内での都市計画については『稚内都市計画第 1 次案報告（第 2 部）1951～1952』が残されているが、丹下健三が稚内都市計画のなかでもっとも重視するのが都心＝広場であり、市庁舎、文化施設、商業施設によって囲まれ、交通の十字路となり都市活動の中枢として機能する。これはほとんど CIAM（近代建築

国際会議）の「都市のコア le noyau de la ville 」の議論と平行した考え方である[17]。とりわけル・コルビュジエの戦後復興計画、サン・ディエの都市計画 Urbanisation de Saint-Dié, 1945 などの中心市街地の文化的再生の論理は、丹下健三の復興都市計画の理念と関連している（図２）。サン・ディエの都市計画では行政管理棟、自治会館、美術館、プールなどの複合体によって新しい「コア」が形成され、破壊された大聖堂のある旧広場と接続している。このような都市空間構成は、破壊された原爆ドーム、平和記念施設、運動施設、文化施設の複合する丹下健三の後の「平和公園計画」とも類同する考え方である。

丹下健三自身はこのような近代の新しい「コア」を「コミュニティ・センター community center」[18]と呼んでいるが、そのような施設の出自が広島市の復興都市計画にあったことは明白である。そしてそこにはル・コンビュジエの戦後復興都市計画との類似性を認めないわけにはいかない[19]。

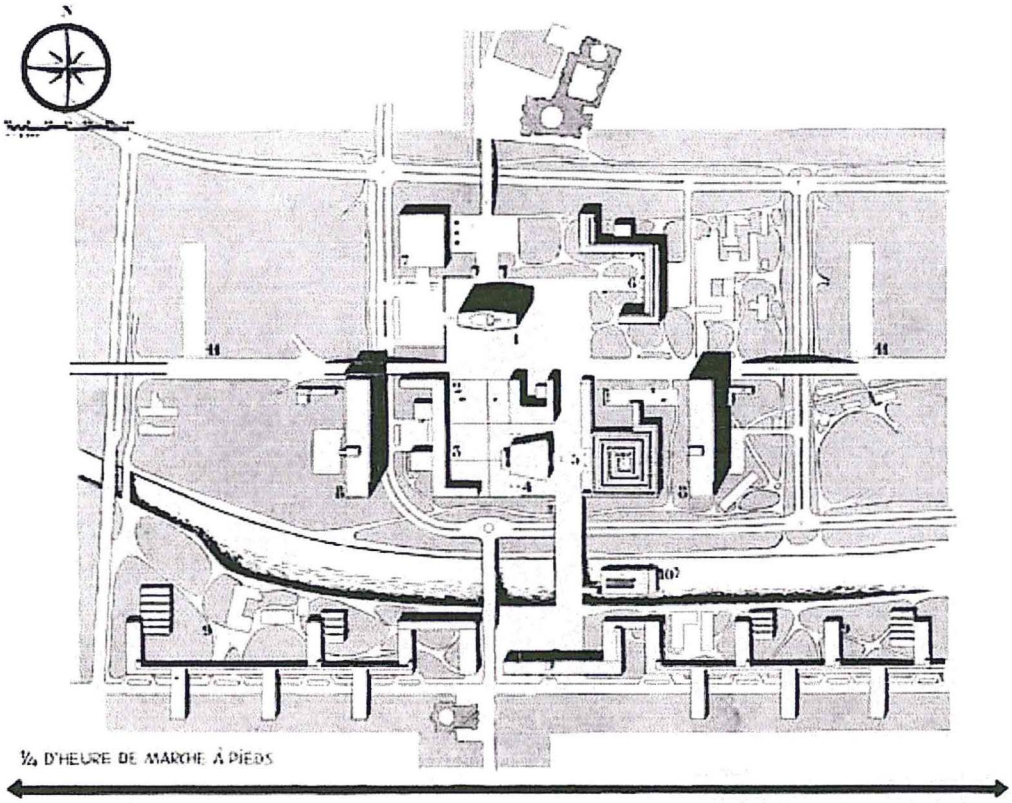


図２　ル・コルビュジエによるサン＝ディエの復興都市計画図（1945）[20]

３.「広島平和記念公園」の設計競技

丹下健三は西洋中世の自由都市における市民の自発性によって建設される広場を「コア」の理想とし、日本の江戸時代にもそのようなものの萌芽的形態があるとしながらも、資本主義社会のなかで西洋日本ともにそのような「コア」は失われているとする[21]。丹下健三において「都市の建設のコア」となるべきものは、「ガバメント・センターgovernment center」と「コミュニティ・センターcommunity center」であるが、「ガバメント・センター」については、東京都庁舎（1957)、清水市庁舎（1954)、倉吉市庁舎（1957)、今治市庁舎（1958)、香川県庁舎（1958）などにおいて、市民に開かれた「広場」が試みられている。一方、市庁舎の移転をしないことになった広島市では、広い意味での文化施設を中心とした「コア」が中心的な主題となってくるのは必然である。

こうして丹下健三は1948年、広島市長浜井信三に対して再度平和公園内につくる施設について提案を行っている。内容はコミュニティ・センターと、国際的機能と慰霊機能を持つ施設（広場、集会所、国際会議場、食堂、図書館、原爆資料室、及び記念塔など）を中島地区に計画するものである[22]。1946年～1947年の土地利用計画における提案内容に加えて、国際会議や記念塔などの機能が加えられている。CIAM的なモダニズムの「都市のコア」を志向する丹下健三にとって、過去の記念碑は否定されるべきものであったが、この時点ではその肯定に転じているのである。

この変節について、丹下健三は次のように述べている。

「私たちが考えた広島のコミュニティ・センターは、しかしきわめて特殊なものであった。それは広島市民生活再建の中核的な施設であるばかりではなく、さらに、あの広島の記憶を統一のある平和運動にまで展開させてゆくための実践的な機能をもった施設であって、それに加えて、記念塔のごときものの必要を認めなかったのである。

しかし、そのような判断にもかかわらず、私の心情は、迷わざるを得なかった。慰霊堂を含む記念塔を、広島の人びとが求めていることのなかに、意味が

あるように思えるのであった。無垢の犠牲者を、父や母や、妻や子にもつ広島の人びとの願いにたいして、何か慰霊し、祈念するための施設を、ささやかなものであるにしろ、もちたいと感じたのである。これが、私たちの答であった。」[23]

高校時代を広島で過ごした丹下健三にとって、広島という土地に特別の思いがあったことは想像に難くない。しかしそれは単純に同情や共感によって、慰霊のための施設を補足的に追加したというものではなかった。それは、その 1 年後に構想される「平和記念公園」の空間構成において明らかになる。

1949 年 5 月には、「広島平和都市建設法」が国会を通過し、「広島平和記念公園」の設計協議が同年 4 月 20 日から 7 月 18 日まで募集される。法律に基づき 1952 年に「広島平和記念都市建設計画」が正式に決定される以前のことである。この「平和記念公園」の設計競技条件では、平和記念館の中身を各種国際会議が出来る集会室、原子爆弾被害資料の陳列室、平和の鐘を釣る塔、集会場、小会議室、事務室、図書館、大食堂などとしており、1948 年に丹下健三が広島市長に提案した内容が反映されている。

1948 年の市長への提案に認められるように、丹下健三は平和を主としながら同時に慰霊を忘れないという立場に変わっていくが、設計競技では平和のみが掲げられ、慰霊の場は求められなかった[24]。そこで、丹下健三は「平和を創り出すための工場」でありたいとし、その独特な言い方で、平和を観念的に祈念することと、平和を創り出すという建設的な意味を併存させる。

「平和は訪れてくるものではなく、闘いとらなければならないものである。平和は自然からも神からも與へられるものではなく、人々が實踐的に創りだしてゆくものである・・・わたくし達はこれについて、先ずはじめに、いま、建設しようとする施設は、平和を創り出すための工場でありたいと考へた。・・・これが計畫の上にどのように實現されるであらうか。それは單な公園の趣味的な小細工から得られるようものではない。またそれは建築の記念性を附與して得られるものでもない。むしろ近代建築はそのような態度を否定する。わたくし達は、全體の総合的なプランニングのなかにこの二つのもの［實踐的機能と

精神的な象徴］の調和が見出されうるものと考えている。いま、この場合、それは、この土地のもつ意味と、そこに新しく建設される施設との調和のなかに生まれてくるものであると思う。原子爆弾の爆心地ということ、そこから夾るこの土地のもつ記憶と、平和えの希から生まれようとしている新しい機能的な施設との綜合のなかに探求さるべきものであらう。」[25]

過去の形骸化あるいは定式化への批判を読み取ることも出来るが、しかしそれは単に未来志向の平和概念とは言えない。実際、丹下健三が提案した平和の鐘の吊られるアーチは、原爆ドームをその額縁に収めるものである。丹下健三が平和を過去の慰霊と未来の創造の半ば両義的な性格において読み取ったことは、アーチによる空間演出からも明らかである。

その選評において、「100 米道に面する敷地境界線の中心とこの元産業奨励館とをつなぐと、それは 100 米道路と直角をなす。この線を主軸として諸種の建造物や園内諸施設を配置計画したことに、1 等案のまず大きな特徴と長所が見られる」とあり、中央を通る軸線の時間的な象徴性よりもむしろ都市計画的な方法論が評価されている。しかしそれは、広島市の中島地区においてはじめて構想されたものではなく、丹下健三の都市空間構成の基本的な道具立てである[26]。

また一方で、未来的な平和志向は、丹下健三の説明通りに「四つの記念的な施設―記念館―廣場―祈りの場所―原爆の遺骸」[27]で焦点を結んでいるわけではない。ル・コルビュジエにおけるモニュメンタリティの構成と類同し、バロック的な焦点で完結せず、それを付き向けて開放系を構成する[28]。実際、透視図は競技対象地区の中島地区の北側、基町地区までが描かれ、記念館同様、ピロティにコの字型ヴォリュームが浮遊する施設が、軸線を避けるようにして描かれている（図３）。基町地区の構想についての説明は全くなされていないが、丹下健三が何らかの構想を抱いていたことは否定できない。実際、この透視図では後の平和大通りの両端に 3 本の橋が架橋されている。平面図や模型では 1 本であるから、丹下健三が設計競技で求められていた以上の壮大な計画を企てようとしていたことの証左と見ることも出来る。

要するに、丹下健三における「平和の工場」とは、モダニズムの構成原理を用いながら、被爆という事実を基点として過去の記憶へとどこまでも遡り、また未来へとどこまでも伸びていくような生成のことを意味していると解釈できる。

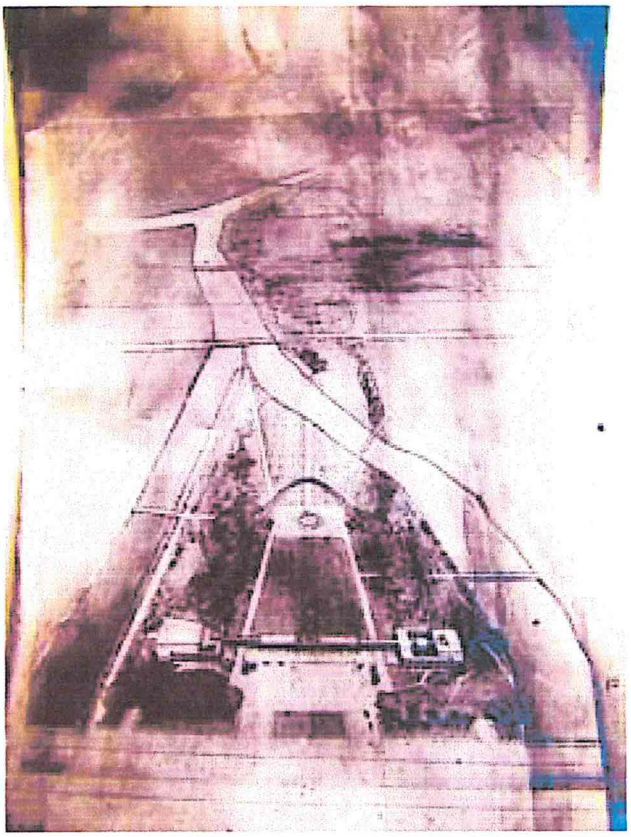


図３　丹下健三による「広島平和記念公園」設計競技の透視図（1949）[29]

４.「広島平和公園計画 PEACE PARK PROJECT」の構想

1949 年 5 月の「広島平和記念都市建設法」の可決成立によって、1950 年から 5 カ年計画が予算化される。1949 年 8 月 6 日に広島平和記念公園設計競技に当選を果たした丹下健三の案は、平和公園そのものの整備と平行して、1951 年 2 月からは陳列館の工事が、そして記念館、慰霊碑、公会堂の建設は大幅に遅れながら進められていく。

1949 年 5 月の「広島平和記念都市建設法」の可決成立後の広島市による都市計画事業についての文書としては、「廣島平和記念都市建設事業計画案（廣島平

和記念都市建設綜合計画案)」(1949年9月23日、広島市公文書館蔵)[30]、「廣島平和記念都市建設構想試案」(1950年4月、広島市中央図書館蔵)などが残されている。それらと前後して、丹下健三は「平和記念公園」の北側の基町地区を加えた拡張公園計画というべきものを策定している。この計画については、丹下健三の自発的な構想でも、広島市からの公式依頼でもない[31]。

1949年9月23日の「廣島平和記念都市建設事業計画案」では、「平和記念公園」だけではなく、基町地区の中央公園内に体育施設、児童施設、観光施設などの諸施設が計画されている[32]。このような施設の計画について丹下健三が広島市に助言したという証拠はない。すでに、第二次世界大戦後の広島市では、退役した軍人や教員による様々な戦後復興の動きが自主的に始まっている。なかでも、1947年頃に地元の学校教師らを中心に、広島児童文化振興会が結成され、基町地区に構想され実現した「広島児童文化会館」[33]の計画など、戦後復興として未来を担うこどもたちのための環境を整備しようとする計画が、建築家から教育従事者まで様々な人々によって構想されている[34]。

ところが、この「廣島平和記念都市建設事業計画案」における児童施設については「児童センター」と名付けられているが、すでに基町地区に竣工していた「児童文化会館」との関連はおろか、その存在についても言及されていない。実際、広島市では「児童文化会館」はその撤去が前提とされていた[35]。藤森照信によると、丹下健三の「平和公園計画」は1949年9月に固まるとしているが[36]、この広島市作成の文書以外に丹下健三による配置計画図は、管見ではない。かりにこの時期に「平和公園計画」の構想が固まっていたとすると、1949年5月〜7月に作成されたであろう中島地区だけの「平和記念公園」の設計競技から2ヶ月後であり、設計競技以前から構想があったことは否定できない。つまり、1946年からの土地利用計画の調査研究の段階から、1949年の平和記念公園設計競技までの間に、何らかの構想を丹下健三は頭の中で描いていたと考えられるのであるが、それまでの丹下健三の土地利用計画では「児童」という鍵語は出てこない[37]。中島・基町地区に先立って決定されていたことは、「大公園」ということだけである。それゆえに、民間による「児童文化会館」の建設活動が影響したことは否定できない[38]。

丹下健三の「広島平和公園」の構想に関して、確認できる最初の関連文書は、1950年3月30日に丹下健三が広島市長室の藤本千万太に宛てた手紙である。

「先般広島にお邪魔いたしました折に　吉田社会教育課長からお話しがございました児童図書館のことあまり判然とした依頼もございませんでしたので実は多忙でもあり　ついそのままにしてあったのですが、村田君が先日上京いたし、吉田課長がその設計は出来ているか　と催促をされているということなので　いささか不意打であわてましたが、目下その大略の設計を進めております。広島に参りますまでには余り日もございませんし、充分検討する余裕もございませんが、大略の設計を持参いたすつもりにいたしております。そのこと市長をはじめ吉田課長に御伝言いただければ幸いです。」[39]

やはりここでも、「児童文化会館」との関連には言及されていない。1950年3月の段階では、将来的な全体構想のなかで、まず「児童図書館」を建設しようという広島市の意向のみが明らかである[40]。しかしこの手紙の文面を見る限り、丹下健三はおよそ年明けまでは基町地区の構想を具体的に作業していたわけではなく、1950年3月頃から本格的に基町地区の計画に着手したことが分かる。

そして、1950年4月7日に丹下健三が広島市長室の藤本千万太に宛てた手紙では、「平和公園計画」の構想に関して次のように記している。

「1.　広島市全体計画

要するに広島の都市計画でありますが、今までのところ道路と地域制と公園とがほぼ正式に決定しているのですがその他の施設配置については　県の案、市の案、あるいはいろいろの人の案もあるかと思います。これらについて今後の大筋を決めなければいけないのですが、それをどうしてけっていするのでしょうか。

今回の計画は、例えば今後専門委員会が出来て、そこで検討するための原案を作製するつもりで考えておいてよいものでしょうか。

また、湾港計画、鉄道の環境線などはどう考えてよいものか。この点、お知ら

せ下さい。

私案としては、既存の道路、公園、地域制の上に立って、主要公共施設の配置（—主として平和都市の中心課題となるようなもの）を考えたいと思います。

2.　中央公園計画

児童センターを含めて　また中央公園と合わせて少し考えているのですが、以下のことが懸案です。

1.この道路を変更してよいか。

2.(A)児童センター　河沿いの地点に児童のリクリエーション施設とともに持ちたい

(B)運動施設　東公園にとの案もありましたが立地から言ってもどうもこの地点（中央公園）がよいように思えるのでむしろ中央公園はリクリエーション本位とし、

(C)文化施設　比治山に持って行くという考えも持っています。

この文化施設を中央公園に置くことも考えているのですが、どちらがよいかに迷っている状態です。

この点御意見をお聞かせ下さい。

中島—中央公園にわたる地域　念のため比治山地域の最も詳細な（多分　2,500分の1）地図をお送り下さい。或いは銀山君が上京される折に御持ち下されば幸いです。早い方が結構です。

中央公園計画は　公園計画と各施設計画の配置及形態の略設計をやって見る予定です。

3.　児童センター

この児童センターの計画の一部として図書館が考えられているのですが　先にお話しの　500 万円予算の児童図書館は~~その内に含まれるものかどうか~~　どう考えればよいのでしょうか。

例えば~~これだけで~~この全体で児童センターとすると

この部分が 500 万円で出来る児童図書館という風に判断したものと考える必要があるか？或は　この部分の一部~~まで 500 万円で建築する~~として含まれるものであるという風に漠然と考えておいてよいものかどうか？

御意見お聞かせ下さい。児童センターについては、1/200 程度の平面、断面、立面の略設計程度までにして見たいと考えています。」[41]

たしかに、「児童センター」は案として確定しつつ、文化施設については建設計画が流動的で立地の検討余地を残しているものの、1950 年 4 月に広島市によってまとめられる「廣島平和記念都市建設構想試案」では、1949 年 9 月の「廣島平和記念都市建設事業計画案」に比べると、基町地区に計画される国際的文化施設として、児童センター、運動施設、文化施設を設定し、詳細にわたって丹下健三の構想を踏襲した内容となっている。こうして、1950 年 5 月 27 日に丹下健三が広島市長室の藤本千万太に宛てた手紙では「児童文化センター」および中央公園を含む「平和公園計画」の図面を市に発送している[42]（図４）。

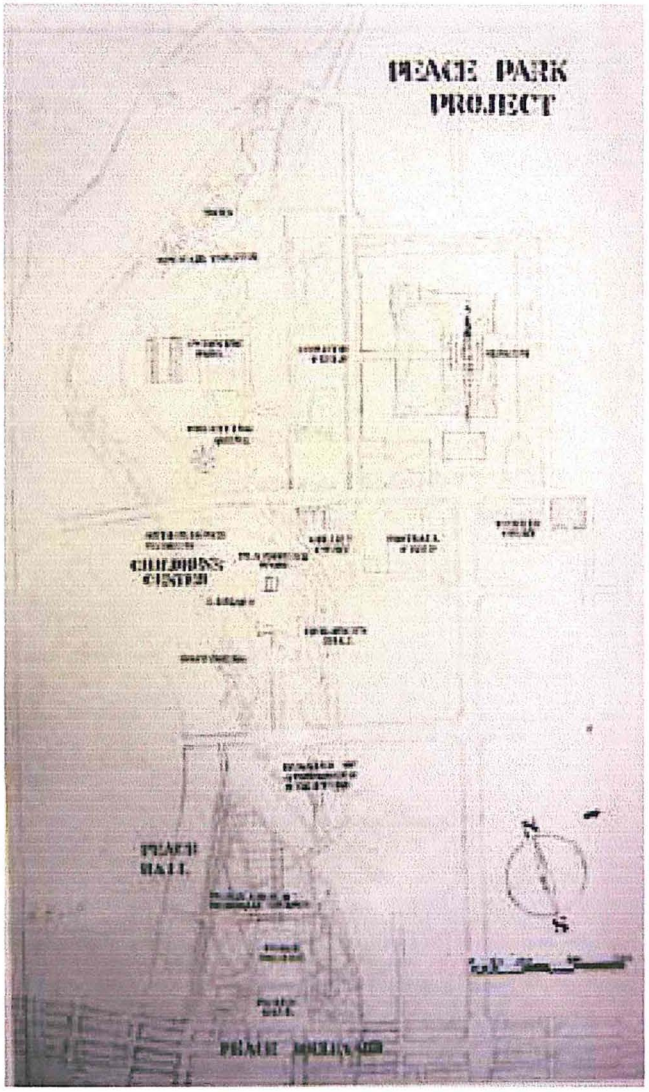


図４　丹下健三による「広島平和公園計画」の配置図（1950）[43]

送付された図面では、原爆ドームより南側の中島地区は、「平和記念公園」の設計競技時と全く同じものであり、北側の基町地区、現在の旧広島市民球場や中央公園、広島城一帯が重点的に計画されている。すなわち、基町地区には美術館などの文化施設地区、フットボール場や陸上競技場などの運動施設地区、そして児童図書館や児童科学館などの児童施設地区がゾーニングされている。1950 年 4 月 7 日の丹下健三の手紙での内容をそのままかたちにした計画図を作成している。

このように、諸施設の都市計画的意義に配慮する一方で、1949 年 7 月の「平

和記念公園」の設計競技案の透視図において、平和大通りに架橋されていた 3 本の橋が踏襲している。つまり丹下健三は、平和大橋（新橋）の幅員を中央の車道部と同程度とし、副道にも将来架橋するという理想の理念を抱き続けているのである。

設計競技のあった 1949 年 7 月の段階から中島地区の北側に関心を寄せていたとしても、1949 年 9 月以降、おそらく 3 月以降本格的に取り組みを始めた計画をこのような配置図にまとめるのは極めて短期間の作業であったと思われる。実際、広島城内の「美術館」は、ル・コルビュジエの「限りなく成長するミュージアム Musée à croissance illimitée, 1939」を、「競技場」は「10 万人収容のスタジアム Stade de 100 000 places, 1936」の模写である。これらの計画は既にル・コルビュジエの『全集』に掲載されていたもので、丹下健三はそれを参考に広島の基町地区に適応したと考えられる。また、児童施設に関しても、「児童センター本部」は先の「広島平和記念カトリック聖堂」の設計競技案（1948）のシェル構造を変形したものと推測される[44]。唯一参照元がないものは、「児童図書館」を含め小規模の児童関連施設であり、円形の輪郭をもつものである。

丹下健三によるこの図面は、広島市でも焼き直して描き直されているが[45]、修正は何一つ加えられていないことから、丹下健三のこの計画が、建築家の単なる空想的な構想ではなく、実際的な施設計画検討を反映した計画案であったことは確かである。

こうして 1950 年 10 月の『国際建築』で「平和公園計画」が発表される。広島市における復興計画という特殊事情を反映して、中島地区の平和記念施設、基町地区の文化施設、児童施設、運動施設の複合体が、「都市のコア」を形成するという CIAM にはこれまでになかった構想ができあがる[46]。構想は広島市に提示したものよりも更に壮大なもので、ボートハウスは城南通空鞘橋北側へ移動、体育館も追加されて、詳細にはいくつかの修正が加えられている。広島城内に 2 棟の高層図書館が追加されているが、これもまたル・コルビュジエの「アルジェの都市計画における高層建築物 Plan Alger, 1942」を参照したものである。

しかしその一方で、平和大通りの橋は 3 本から 1 本に変更されている。平和大通りは 1950 年（昭和 25 年）11 月に着工され、1952 年（昭和 27 年）6 月に完

成していることから、その工事計画を鑑みて、原案を現実的に修正したと推測される。

このように、丹下健三が広島市の地域的事情に向き合っていたことが、結果的に世界的に見ても特異な性格を帯びたものとなった。そのことがきっかけとなって、CIAM の国際会議に招聘され、1951 年 7 月、第 8 回 CIAM 会議（CIAM8, Hoddesdon, England, The Heart of the City）に丹下健三は、前川國男、坂倉準三とともに参加している[47]。1950 年 10 月の『国際建築』に発表された図面と内容的には同じものである（図５）。それ以降、「平和公園計画」として発表される図面もまたすべて『国際建築』の再録である[48]。

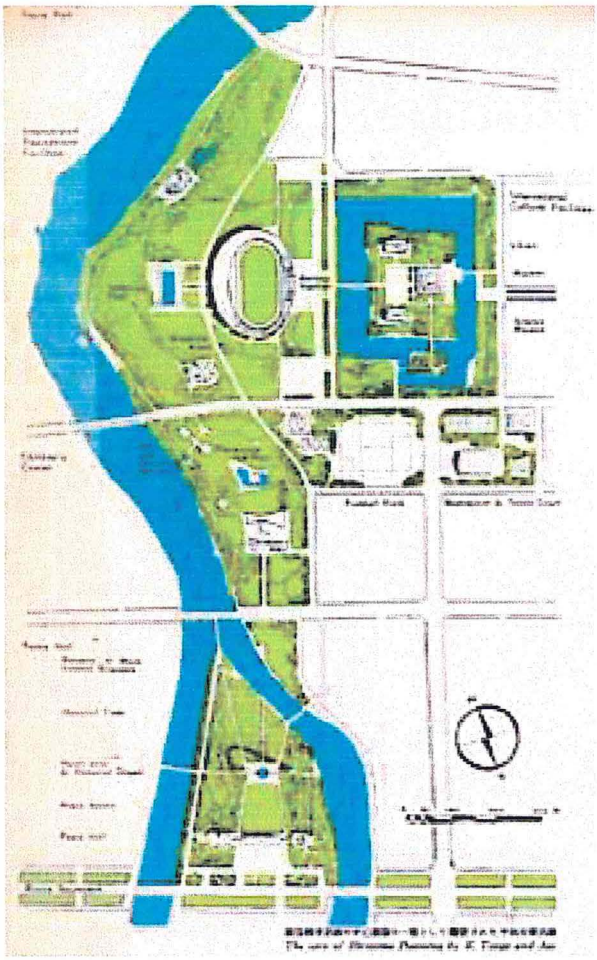


図５ CIAM においてプレゼンテーションされた丹下健三による「平和公園計画」の配置図（1950）[49]

5.「広島児童センターCHILDREN'S CENTER」の構想

しかしながら、丹下健三が CIAM で世界にアピールした「都市のコア」としての「平和公園計画」は、広島市では文化施設地区や運動施設地区が取り上げられず、平和公園と児童施設地区のみが取り上げられている（図６）。文化施設地区の配置が未決定のままであったことや少なくとも広島市からは「児童図書館」の設計を丹下健三に依頼していたという事情もそこには反映されている。

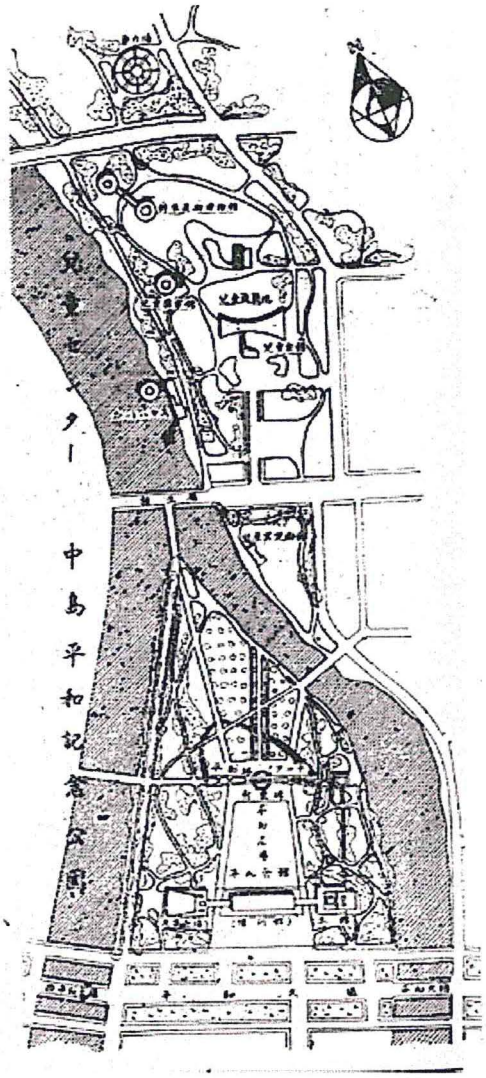


図６　広島市による「平和公園計画」の配置図（1952）[50]

丹下健三は「平和公園計画」のなかで、中島地区と原爆ドームを挟んで連結される児童関連施設地区を「児童センター」と命名しているが、この計画図については「平和公園計画」とほぼ同時期、1950年5月25日付けの図面が残されている[51]。「児童センター本部」と名付けられた中心的施設は、丹下健三が「平和記念公園」の計画で構想した、広島平和記念資料館から原爆ドームに向かう軸線の延長上に位置している。施設への動線となる道も軸線に沿って整備され、建物の形態も軸線の部分を低く抑え、軸線そのものが強調されている。軸線に沿った道は「児童センター本部」で止まり、施設の左右から有機的な曲線の道が児童施設群の間に延び、他のスポーツ施設や文化施設に続いている。「児童センター本部」は「平和記念公園」南側と北側を結ぶ役割をしている（図7）。

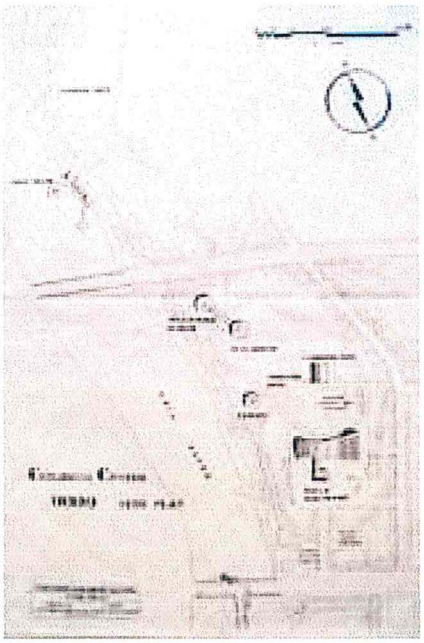
「廣島児童センター計画説明書」（1950年6月）によれば、

「広島平和都市の中心的課題の一つは、平和都市の次代の擔ひ手である児童を育成するにふさわしい環境と施設とを建設することである。そのために平和公園の一角に児童の国際親善のための文化施設とリクリエーション施設から成る児童センター（Children's Center）を計画している。

この土地は爆心地を中心として、平和会館と相対している河沿いのすぐれた環境を持った地域である。此処に児童のための施設を建設して、世界と結ばれた児童の楽園とし、来るべき次代の平和の担当者としての児童がすこやかに育成されることを希求しているのである。」[52]

「・・・平和都市広島建設の構想に元ずく中心的課題の一としての平和公園全体の将来計画の中の有機的関係を持った主要施設として立地については、上記公園中利用主体たる児童の近接に至便且つ大人のための他施設えの動線によって区切られることなく、平和公園内を走る通過交通路線によっても分断されることなく、一体として使用し得ること、河岸を積極的に利用して複雑な機能を充足せしめると同時に、児童の生活環境に多様性を持たせること、等の条件を満足し得る如く考慮した。」[53]

広島市による文書であるが、おそらく丹下健三の意図が十分に反映されたものと考えられる。機能的には、利用の主体であるこどもの利用しやすいように、大人のための他施設への動線や、公園内を走る交通機関によって分断されないよう、一体として利用できるようにしたとある。「児童文化会館」の自己完結的な機能計画や配置計画に比べて、野外活動への配慮があり、平和都市計画的な位置づけが明瞭である。中島地区の「平和公園」から原爆ドームを貫いて、基町地区に伸びる一本の軸線が、全体の施設構成を貫く原理として作用していることが分かる。「児童センター本部」の北側には、破線で「児童文化会館」の位置が示されているが[54]、この建物が軸線に沿ったものでないことは明瞭であり、「東京計画 - 1960」で展開される「求心型・閉鎖型ではなく、線型・開放型」[55]が志向されていることが分かる。



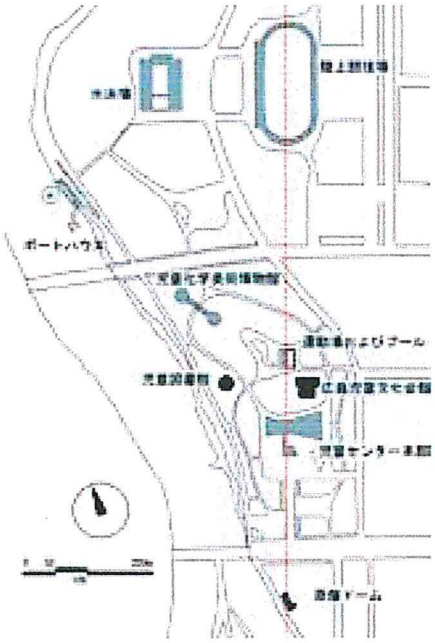


図７　丹下健三による「児童センター」の配置図（1950）及び図解[56]

同じ「廣島児童センター計画説明書」（1950 年 6 月）によれば、

「児童を対象とする施設としては、健康、明瞭、明快・・・等すべて利用者にふさわしい内容の自然にあふれ出たものが最も望ましいものであることは他

言を要しない。本計画に於ける如くその内容の豊富且つ多種多様に渉る場合には、之を一個の建物として計画する場合はその形態が課題となり上記の性質を保持することは困難であり、内部の動線は複雑にすぎ、このため各部の機能の発揮に万全を期するためには唯各部間の動線の解決のためにのみ相当大なる床面積を必要とし建設費の不利な配分を結果とする。之に反し所要の内容を前記の敷地の諸条件とにらみあはせ、比較的相似たる内容のもの、利用管理上の緩急度、利用の形態及び頻度等によって数個の建築群として自然の環境の中に適地に分散配置させる場合には、積極的に以下に述べる如き利益を得ることが出来る。即ち、自然環境と建物配置とが一体となって得るセンターとしての地域的なまとまりの良さ、各々の施設を開放的にすることによつて室内と自然環境とを一体として使用し得ることから得られる健康さ、各々の内部機能の自然にあふれ出た軽快な形態のもつ明朗さと変化等である。」[57]

複合施設とせず分散配置にしたことについては「健康、明朗、軽快」という3つのキーワードを挙げ、複合施設とした場合はこれらを満足できないとし、分散配置とした場合には、自然環境と建物配置とが一体となることによって、3つのキーワードを得ることができるとしている。それは築地小劇場をモデルとした比較的閉鎖的な「児童文化会館」[58]への機能的・空間的観点からの批判であり、自然環境の中で自由に動き回る児童の姿を丹下健三は想像したに違いない。

また分散配置の方法については、敷地の条件に合わせ、比較的近い機能のもの、利用管理上の緩急度、利用の形態及び頻度によって数個の建築群として、自然の環境の中に分散させるとしているが、これは明らかに南北を結ぶ軸線上に位置する中心施設によって秩序づけられる分散の方法である[59]。

6．おわりに

丹下健三は広島市の復興計画を始めた時期から、後に「平和記念公園」として実現される中島地区とその北側、基町地区を合わせた地区を「コミュニティ・センター」として構想していた。そして設計競技案である中島地区の「平和記

念公園」の構想は、基町地区へと拡張した「平和公園計画」の構想へと至る。「平和記念公園」は空間構成的には原爆ドームを貫く軸線によって規定されているが、計画案の経緯や空間構成を考えると、中島地区と基町地区を結ぶ丹下健三の構想ははじめから萌芽していたと考えられる（表１）。

なかでも児童施設へと特化した「児童文化センター」を計画することによって、基町地区には唯一、「児童図書館」が実現することになる[60]。しかしながら、丹下健三の「平和公園計画」の全体構想そのものは、「広島平和記念都市建設法」に基づく広島市の都市計画図に描かれることはなかった（図８）。

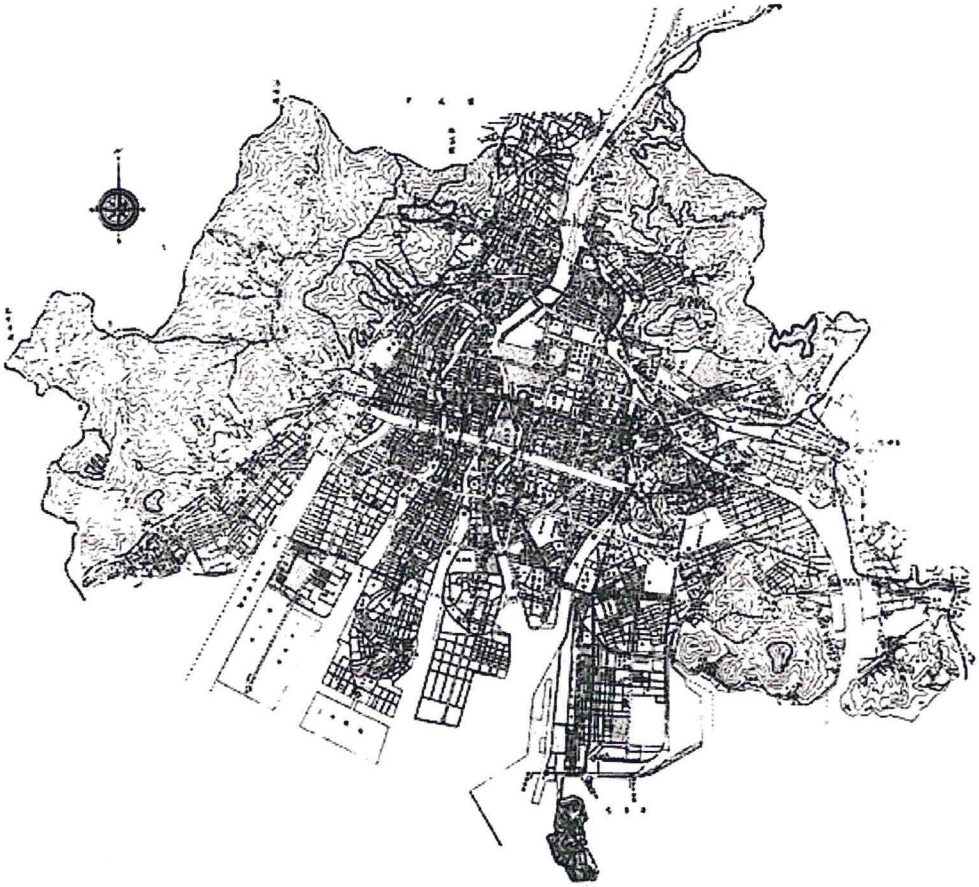
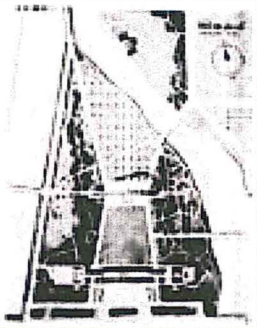
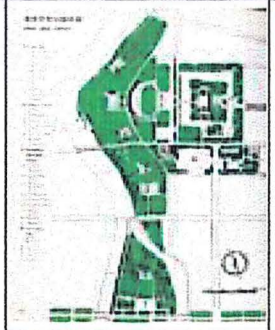
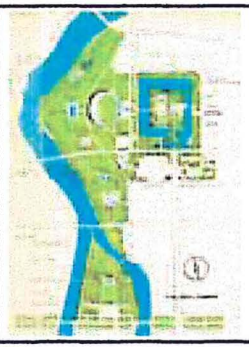


図８　広島市による広島平和記念都市建設計画図（1952）[61]

表1　丹下健三による「平和公園計画」の構想過程[62]

	平和記念公園設計競技案の平面図	平和記念公園設計競技案の透視図	「広島平和公園計画」の策定	『国際建築』1950年10月に発表された「広島平和公園計画」	CIAM8でのプレゼンテーション図面	『現実と創造』、美術出版社、1966、p. 48
図						
出典	広島市公文書館蔵（丹下健三より藤本千万太氏への寄贈写真、『建築雑誌』1949. 10-11に掲載）	広島市公文書館蔵（丹下健三より藤本千万太氏への寄贈写真、『建築雑誌』1949. 10-11に掲載）	広島市公文書館蔵（模写を作成した広島市役所員の寄贈）	『国際建築』1950年10月、p. 30	The Heart of the City, 1979, p. 136：『新建築』1954. 1.	『現実と創造』、美術出版社、1966、p. 48（『丹下健三』、新建築社、2002、p. 146
年月日	1949年7月	1949年7月	1950年5月25日（広島市公文書館による整理年表による。実際には1950年3月～5月に作成と推定）	1950年10月	1951年7月（CIAM8出席）	1966年
備考	平和大通りの橋は1本。模型も同様。	平和大通りの橋は3本と推測。但し、平面図・模型では1本。また、設計競技対象地区外（基町地区）に施設計画の痕跡。	平和大通りの橋は3本、ボートハウスは相生橋北東詰め。広島市役所建設局計画課による全く同じ配置図で施設名称が日本語の計画図（広島市公文書館蔵）。	平和大通りの橋は1本、ボートハウスは城南通空鞘橋北側。広島城内に2棟の高層図書館の追加。体育館の追加。	『国際建築』1950年10月に発表された「広島平和公園計画」の転載。	『国際建築』1950年10月に発表された「広島平和公園計画」の転載。

しかしこのような丹下健三の構想は、純粋に内在的な要因からだけでは理解できない。それは「平和記念公園」以前の市民的構想による「児童文化会館」の影響によるものと考えることができる。少なくとも、丹下健三が実際に基町地区に計画案を描いたときには、既存建物として「広島児童文化会館」があり、丹下健三自身の計画案にもその位置が明記されているからである。その社会的要因が、丹下健三の内在的理念である「平和の工場」と合致したのである。たしかに、「こども」という主題は「未来」に相応しいイメージである。

丹下健三は、建築を含めた芸術が人間像を見失った時代について、次のように述べている。

「近代芸術は一方においては極端な普遍化、極端な一般化ということから、身をたちなおして、それぞれの社会、それぞれの段階におかれた具体的な民衆に対して奉仕してゆこう、もう一つは作者一人しかそこにはいないという密室の世界から、もう一度社会へ定着させようとする運動が始まっている、と私は考えたいのであります。それを通じてはじめて具体的な人間像を再び獲得することができる・・・」[63]

丹下健三は、建築家という制作者の内在的理念と大衆社会の外在的論理をいわば弁証法的に綜合しようとする。これは他の芸術にもまして社会的な意義が問われる建築家という職能の宿命であり、とりわけ丹下健三の独自の方法論とは言えない。むしろ、「平和公園計画」の構想過程において明らかなのは、「民衆と作家」という二元論の融解であり、丹下健三の社会的感性・風土的感性・芸術的感性の交叉である。

いずれにしても、戦後復興都市計画以来、丹下健三は中島地区の平和記念公園の諸施設だけでなく、基町地区を加えた「平和公園計画」という現代社会に開かれた「都市のコア」を志向していた。その独自性は中島地区の「平和記念公園」、原爆ドーム、そしてその北側の基町地区を貫く軸線の開放性である。軸の出発点は無論「平和記念公園」の陳列館のピロティ下である。

「はじめ、私は、この鼻をつく臭気のただよう、凄惨の気にみちたこの廃墟に立って、考えていたのである。そこから立ち上がってくる力強い人間の意志を、それと同時に、母親のようにやさしく抱く感情と、このようなことは、素朴な機能主義の建築の考えかたからは単純に割り切れることのできないものであった。しかし、私は、それを諦めてしまわなかった。むしろ逆に、それまでの私の素朴な機能主義の建築観は、この広島の体験によって、大きくゆさぶられたのである。中央の門のような記念陳列館に強さを、両側の二つの建物にやさしさを、表そうとしていたのである。このような表現のはたらきが、広島のこの建築が、社会にたいして果たすもっとも大事なはたらきなのだということを信じていた。そのころ、私には日本の伝統への共感がよみがえってきつつあった。伊勢や桂の建築が私たちの同胞の心のそこに、強さとやさしさの故郷として、うずいているように思われた。伝統への共感は、社会への共感に裏付けられているように思われた。このようなことがこの広島の建築の設計の過程で、はたらいていたのである。」[64]

確かに丹下健三は、広島での経験の後にいくつかの日本の伝統について執筆し、1950年代のいわゆる「伝統論争」にも巻き込まれていくことになる[65]。しかしこの「伝統」という主題が、「社会への共感」に出自があることは重要である。丹下健三のそのような感性は、単に建築物の意匠表現のみならず、広島という場所において慰霊の施設に対する否定から肯定へと転回したことにも認められるものである。陳列館から原爆ドームへと軸によって開かれていく、過去の出来事の慰霊の場であると同時に未来のための「都市のコア」は、被爆という過去を更に遡って「伝統」を内包しているのである。だからこそ「平和の工場」は過去と未来の再創造であり得たし、その時間軸たる陳列館から原爆ドームへの軸線は、基町地区にも拡がっていかなければならなかったのである[66]。

註

＊引用は全て原文のままである。[　　] は筆者による補足説明。

1 丹下健三、「廣島計画　平和都市の建設」、『国際建築』、1950 年 10 月、pp.27-39。
2 丹下、前掲論文、p.27。
3 丹下健三、「廣島計画（1946～1953）」、『新建築』、1954 年 1 月。
4 石丸紀興、「戦災復興計画策定時の嘱託制度による広島市土地利用計画に関する研究」、『都市計画学会論文集』、No25、pp.475-480、2008 年；石丸紀興・李明・岡河貢、「広島の復興都市計画と丹下健三―広島における建築家丹下健三の活動に関する研究」、『日本建築学会計画系論文集』、第 557 号、339-345、2002 年。
5 坂田晃一・石丸紀興、「広島戦災復興計画における計画文脈に関する研究ーその 1 公園緑地計画を対象として」、『日本建築学会中国・九州支部研究報告』、第 9 号、1993 年。
6 石丸紀興、「広島における計画思想としての平和記念都市の形成過程とその変遷・変容に関する研究」、『都市計画学会論文集』、No.43-3、2008 年、pp.187-192。
7 石丸紀興、「広島における平和記念公園コンペティションの計画・設計条件に関する考察ー主として丹下健三らのコンセプト形成をめぐって」、『日本建築学会大会学術講演梗概集』、2005 年。
8 森田信弥・石丸紀興、「広島における丹下健三の建築に関する研究ーその 1 広島平和記念館の形成過程及び改修計画について」、『日本建築学会中国支部研究報告書』、第 17 巻、1992 年。
9 李明・石丸紀興、「終戦直後の広島における暁設計事務所の活動について―戦前・戦後の広島における建築家の活動に関する研究」、『日本建築学会計画系論文集』、第 537 号、311-318、2000 年。
10 丹下健三の広島市における復興都市計画との関わりの詳細については、石丸・李・岡河、前掲論文、参照。
11 広島市編、『戦災復興事業誌』、広島市、1995、p.40。
12 石丸・李・岡河、前掲論文と丹下健三・藤森照信、『丹下健三』、新建築社、2002、pp.121-122 とでは日付が食い違っている。ここでは石丸論文に記述に従う。
13 丹下、「廣島計画 19461953」、前掲書。
14 出典：広島市公文書館蔵（広島都市生活研究会編、『広島被爆 40 年史　都市の復興』、広島市、1985、p.48；広島市編、『図説広島市史』、広島市、1989、p.164）。
15 石丸、「戦災復興計画策定時の嘱託制度による広島市土地利用計画に関する研究」、前掲書、参照。
16 丹下・藤森、前掲書、pp.119-127。丹下健三が関わった戦災復興都市計画は、1946 年 2 月に開かれた東京都都市計画コンペに始まる。丹下健三は東京都新宿地区計画と東京都銀座地区復興計画で参加したが 2 案とも 2 等という結果にとどまっている。次は 1946 年 6 月に完成した本郷文教地区計画である。丹下健三は諸施設のデザインを担当している。1946 年 5 月以降は政府が戦災を受けた全国主要都市 115 の復興のため 1945 年 11 月に創設した戦災復興院による各地の復興都市計画に参加し、前橋市、伊勢崎市、広島市、呉市を担当している。また 1947 年に福島地区都市計画と立川基地跡地の計画に携わっているが、内容については不明である。
17 丹下・藤森、前掲書、p.126 では、ル・コルビュジエと比較して、丹下健三の都市計画では都市のコアの中心施設が余暇の空間よりも重要視されていると考察しているが、実際にはル・コルビュジエの都市計画においても、とくに 1940 年代のアルジェの都市計画 Plan directeur d'Alger, 1942 の頃から都市のコアが重要視されていることから、ほとんど同じ考え方に基づくものであると考えられる。
18 丹下健三、『地域計画の理論』、1950 年 11 月及び『稚内都市計画第一次報告書（第 2 部）1951～1952』、1953 年（丹下・藤森、前掲書、p.123）。建築史家ギーディオンもまた、この

ような「コア」を「コミュニティ・センター」という文脈から捉えている。こうして「都市のコア」の主題はCIAMと関連して、第二次世界大戦後の一つの主題となり、1951年7月の第8回CIAM会議の主題として取り上げられることになる。ギーディオン、生田勉・樋口清訳、「新しい記念性の必要」、『現代建築の発展』、みすず書房、1961、pp.32-47及びEric Mumford, "The New Monumentality", in *The CIAM Discourse on Urbanism, 1928-1960*, The MIT Press, 2000, pp.150-159参照。

19 1951年7月、丹下健三は第8回CIAM大会に招聘されてル・コルビュジエの国際連合Palais de l'ONU à New York, 1947の計画や、インドのチャンディガールの都市計画Chandigarh, La naissance de la nouvelle capital du Punjab, 1951-54を目の当たりにする。サン＝ディエの都市計画についてもこの時に情報を得たことは事実であるが、サン＝ディエの都市計画についてはすでに1946年に出版された『全集 *Œuvre cimplète*』で公表されていることから、丹下健三がこの計画を広島市における諸構想に参照していた可能性も否定できない。

20 出典：Le Corbusier, W. Boesiger éd., *Œuvre complète 1938-1946*, Les Éditions d'Architecture, Artemis, Zurich, 1946, p.139。

21 丹下、「廣島計画（1946～1953）」、前掲書。

22 丹下、「廣島計画（1946～1953）」、前掲書。

23 丹下、「廣島計画（1946～1953）」、前掲書。

24 占領軍のアメリカを強く意識した措置であったと推測されるが（藤森照信、「広島計画を展開した意図・その後の丹下氏の活動」、『広島市公文書館紀要』、第23号、1999、p.55参照）、設計競技で慰霊機能が削除された理由は不明である。広島市における未来志向へと至る「平和」概念の生成については、石丸、「広島における計画思想としての平和記念都市の形成過程とその変遷・変容に関する研究」、前掲書、参照。

25 「廣島市平和記念公園及び記念館競技設計等選図案1等」、『建築雑誌』、第64輯、第756号、1949年10～11月、p.42。

26 「平和公園」に用いられた軸線とつづみの形は、1942年の「大東亜建設記念造営計画」において、すでに用いられている。そして「平和記念公園」の軸線は「東京計画1960」へと発展していく。

27 「廣島市平和記念公園及び記念館競技設計等選図案1等」、前掲書、p.43。

28 藤森照信は、「平和公園」の設計競技案にル・コルビュジエのソヴィエト・パレスPalais des Soviets à Moscou, 1931の参照を指摘し、そのアーチにおけるある種の空洞を形成することによる新しい記念碑性（「巨大な物に頼らない記念碑性」）を解釈しているが（藤森、「広島計画を展開した意図・その後の丹下氏の活動」、前掲書、pp.49-51参照）、原爆ドームという一つの焦点を積極的に解釈しているわけではない。むしろ、藤森照信は、丹下健三のアーチが瀬戸内海を志向していたことを強調する論理へと展開していく。

29 出典：『建築雑誌』、第64輯、第756号、1949年10～11月、p.42。

30 1949年9月23日付けと同様用の表題をもつ「廣島平和記念都市建設事業計画案」（1949年10月3日、広島市公文書館蔵）も、内容的にはほぼ同様である。

31 石丸紀興、「広島平和記念公園コンペ後に広島市担当者に送付された丹下健三書簡に関する研究その2　計画対象区域（計画範囲）に関して」、日本建築学会学術講演集、2011年8月、pp.361-362において、外在的要因としては、1950年3月から6月に神戸で開催された日本貿易産業博覧会への出展が一つの契機であったことが指摘されているが、関連書簡の文面からは「平和記念公園」のみの展示であったと推測され（丹下健三が藤本千万太に宛てた手紙、[1949年12月1日～1950年3月30日までの間と推測]）、必ずしも基町地区の構想の決定的な契機ではなかったと思われる。

32 基町地区に構想されている文化施設もまた、広島市では記念施設として位置づけ、補助金を得る考えであった。しかしこれには委員から異論が出て、こどもだけではなく大人も使える施設にする必要性や、広島城復元の可能性に対する指摘なども出ている（「第3回広

島平和記念都市建設専門委員会要点記録」、1951年1月29日、広島市公文書館蔵)。あるいは慰霊碑を基町地区に設置する案も出ているが(「第4回広島平和記念都市建設専門委員会要点記録」、1951年2月21日、広島市公文書館蔵)、丹下健三の構想を重視して取り下げられている。結局、中島地区の公会堂共々、基町地区の諸文化施設も平和記念施設とは認められない結果となる。

33 1947年頃、戦後の広島の教師らによって広島児童文化振興会が結成され、「児童文化会館」が構想された。1947年8月1日の「廣島児童文化會館建設趣意書」(広島市公文書館蔵)では「文化日本の建設」が第一に謳われ、その未来を担う児童の文化活動の重要性を訴えている。すなわち、

「眞実を愛し、平和を望む人間性を素直に、健やかに明るく伸ばすためには正しく誇り高い文化を身に付けさせることが最も肝要であり、而も喫緊のことでもあります。」(「廣島児童文化會館建設趣意書」、1947年8月1日、広島市公文書館蔵)

その趣意書には、被爆都市という文脈はことさら強調されず、敷地やその意味については全く言及されていない。

そして1948年5月3日、計画の一部として広島児童文化会館という施設が暁設計事務所によって実現している。「広島児童文化会館綜合計画案」(広島市公文書館蔵)などの資料より空間構成の変遷という観点から見ると、その過程はおよそ4期に分類される。

第1期において、「広島児童文化会館綜合計画案」が作成され、この段階ですでに具体的な予算まで考えられていた。計画されていた施設は大ホール、平和記念塔、児童体育衛生館、児童美術館、本館、国際親善館、児童図書館、宿泊所、児童運動場、小動植物園、児童遊園、ターザンプールである。丹下健三による広島児童センター計画と共通する施設名称があり、全体的な配置構成に共通点は見られないが、特に平和のための施設がある点が特徴的である。

第1期の配置構成はこの大ホールが中心になっている。広場を囲うように国際親善館、児童図書館、大ホール、児童美術館、平和記念塔が配置されている。

第2期において、計画されていた施設は大ホール、私学研究所、平和記念塔、本館事務所、児童ホテル、博物館、図書館、国際親善館、美術館、体育衛生館、ワイズシュラープール(ワイズミュラープールの誤記だと思われる)、テニスコートである。第1期同様、丹下健三による「児童センター計画」と同じ施設名称がある。第1期より各施設が詳細に設計されているためこの計画図を第2期とした。配置構成は大きく変わり、南北の軸線を意識しているかのような配置となっている。大ホールと平和記念塔の位置は変更されていない。旧広島商工会議所と思われる施設と原爆ドームの一部が描かれている。

第3期において、暁設計事務所が設計を担当し、第2期で分散配置であった計画が第3期で複合施設となっている。それは資金難を予想してのことと思われる(『広島新史　市民生活編』、前掲書、p.76)。計画されている施設は第1期、第2期と比べると少なくなり、第1次計画と第2次計画とに分けて計画されている。第1次計画では講堂、本館、宿泊施設の3施設のみを建設する計画であった。建築図面は見つかっていないため詳しくはわからないが、講堂は映画、音楽会、学芸発表会、演劇、講演会、展覧会などが行えるよう計画されており、本館は受付事務室、児童教育相談所、児童健康相談所、子供クラブ本館、児童国際親善室、児童生活研究室、児童玩具研究室、紙芝居・童話研究室、音楽舞踏研究室、児童図書館、科学実験室、工作室などが用途として計画されている。そこから、施設の数が減ったのは、削除された施設の機能を複合させて一つの施設としたためであると考えられる。第2次計画では児童遊園地施設(スポーツ施設)、動物園、植物園、農場施設、プールが計画されている。

第4期において、機能としては大ホール、ギャラリー、喫茶室があり、大ホールは映画や音楽会、演劇などができるよう意図されている。

第1期から第4期までの計画の流れを見ると、次第に規模が縮小していることがわかる。第1期、第2期については施設を分散した配置となっているが、第3期、竣工作品は複合的な施設としている。また「広島児童文化会館」の周辺に計画されていた施設の中には児童図書館、児童美術館など、丹下健三による「広島児童センター」に計画されている施設と同じ施設名称も見られる。第1期、第2期に平和記念塔という平和関係施設が計画されている点も特徴的である。

竣工した広島児童文化会館は第3期の一部を具体化したものであり、計画段階と同じ場所に実現している。1948年3月の寄付金募集趣意書には次のようにある。

「文化建設の主体である青少年のために、正しく美しく良き文化施設を提供し、自由と平和と正義に満たされた生活の裡に、彼等の文化的感性を強め、文化的水準を高めて文化建設の素地に培い，国際親善の実を挙げる宿命的義務があると思うのであります。こうした観点から私ども一同は畢生の事業として，広島児童文化会館を世界歴史の転換の楔となった爆心地元護国神社広場の聖地に建設するの悲願にも似た計画書を渡しましたところ・・・」（「寄付金募集趣意書」、最後の館長であった真木児童文化係長による手記「広島市児童文化会館誌 - 昭和二十三年から三十九年までの変遷史 - 」、1964年7月、広島市公文書館蔵）

要するに第二次世界大戦後の跡地利用地から、元護国神社という象徴的な場所が選択されたのであり、都市計画的な観点は欠如して「平和記念公園」となる中島地区との関わりは希薄である。

しかしながら、寄付は十分には集まらず、建設、運営、維持費の不足から料金聴取や成人利用貸し出しもあり世論から批判され、1950年には市に移管されている。その後、現在の中央公園ファミリープールが建設されるのに伴って、1964年に取り壊された。

34 第二次世界大戦後の広島市でのこども事業は「児童文化会館」のほか、「児童文化会館」を計画した広島児童文化振興会による「ぎんのすず」の出版、1950年に「児童文化会館」の計画敷地周辺で開催されたこども博覧会、広島県立図書館の前身の「広島県立児童図書館」の建設などがある。『広島新史　市民生活編』、広島市、1983年及び『新修広島市史第四巻文化風俗史編』、広島市、1958年参照。

35 後の1950年6月の広島市による「廣島児童センター計画説明書」（広島市こども図書館蔵）では、次のように記されている。「尚ほ本敷地内にある既存施設 - 児童ホール［児童文化会館］、商工会議所及び市民館は当初に於いてはそのまま有機的に取り入れ耐用年限の来るをまつて漸次取除き或ひは改造の上一貫せる将来計画に移行するものとする。」つまり、広島市では、「児童文化会館」は仮設的な建築という認識であるが、「児童文化会館」を設計した河内義就のもとで働いていた錦織亮雄への筆者によるインタビューによると、河内には仮設との認識はなかったようである（錦織亮雄への筆者によるインタビュー、2013年1月18日）。

36 丹下・藤森、前掲書、p.146。

37 丹下健三は自らの「児童センター」の計画以外でも、「ゆかり文化幼稚園」（1966年）などいくつかの児童施設を設計しているが、いずれも広島における計画以後のものである。

38 丹下健三は平和記念公園設計競技を勝ち取って以降、「児童文化会館」計画の設計を担当していた暁設計事務所（八丁堀の福屋8階）を広島市での拠点としている。設計競技以前は広島市役所が拠点である（錦織亮雄への筆者によるインタビュー、2013年1月18日参照）。いずれにしても、丹下健三が「児童文化会館」の計画を知っていたとことは、間違いないものと思われる。

39 1950年3月30日に丹下健三が広島市長室の藤本千万太に宛てた手紙、広島市公文書館蔵。

40 ロサンジェルス市の南加州広島県人会から広島市に委託された費用が見込まれたことも、「児童図書館」の建設が優先される理由であろう。

41 1950年4月7日に丹下健三が広島市長室の藤本千万太に宛てた手紙、広島市公文書館蔵。
42 広島市公文書館蔵の図面では、1950年5月25日として整理されているが、その根拠は明らかではない。同時期に「児童センター」もまとめられているが、その一連の図面上に記載された日付が1950年5月25日であること、図面上に記載された施設名称の書式が近似することなどから同定されたものである。実際には基町地区の構想の一部分である「児童センター」よりも前に作成されたと考えるのが自然である。
43 出典：広島市公文書館蔵。
44 藤森照信によれば、「広島平和記念カトリック聖堂」の形態は、オスカー・ニーマイヤーの「聖フランシス協会」（1943）を参照したものである。丹下・藤森、前掲書、pp.133-134参照。
45 広島市公文書館蔵。1951年1月4日の日付。
46 その都市計画図は、「広島平和記念都市建設法」成立以前の1946年の「復興都市計画図」上に「平和公園計画」をコラージュしたものである。
47 CIAM8で発表された「平和公園計画」については、J. Trywhitt, J.L. Sert and E.N. Rogers ed., *The Heart of the City: towards the humanization of urban life*, Kraus Reprint, Nendeln, 1979, pp.136-138及び『新建築』、1954年1月に掲載されている。
48 丹下健三・川添登、『現実と創造』、美術出版社、1966、p.48；丹下健三・藤森、前掲書、p.146。
49 出典：J. Trywhitt, J.L. Sert and E.N. Rogers ed., *The Heart of the City: towards the humanization of urban life*, Kraus Reprint, Nendeln, 1979, p.136。
50 出典：「廣島市お知らせ」、廣島市役所市長室、1952年1月1日。但し、平和大通りの橋は三本のままである。実際には、1952年（昭和27年）3月31日都市計画決定した「平和記念都市建設計画」における幅員30mの半分程度の幅員で建設されている。都市計画決定では中央の1本の橋梁であるにもかかわらず、その年の1月1日付の市の広報紙に3本の計画図を掲載したのは、新年号であり、将来の夢を描いたのではないかと推測される。
51 「児童センター」に関する資料は、広島市公文書館に配置図、鳥瞰図、計画段階の児童図書館の平面図、立面図、断面図が所蔵されている。配置図には0000、鳥瞰図には0003、平立断面図には0001と番号がつけられていることから、少なくとも「広島児童センター」の計画に関する資料0002がつくられていたと考えられるが、広島市公文書館には所蔵されていない。また実現した「広島市児童図書館」の後継施設である広島市こども図書館に「廣島児童センター計画説明書」（1950年6月）と「広島市児童図書館」の青焼図面が保管されている。
52 「廣島児童センター計画説明書　1主旨」、1950年6月、広島市こども図書館蔵。
53 「廣島児童センター計画説明書　2綜合計画」、1950年6月、広島市こども図書館蔵。
54 「児童文化会館」が描かれているのは配置図のみで、鳥瞰図には描かれていない。
55 丹下健三、「新しい第二の都市軸の提案 - 緑の都市軸」、『復刻版　建築と都市　デザインおぼえがき』、彰国社、2011、p.104（1966年3月記）。
56 出典：広島市公文書館蔵及び筆者作成。
57 「廣島児童センター計画説明書　2綜合計画」、1950年6月、広島市こども図書館蔵。
58 錦織亮雄への筆者によるインタビューによると、「児童文化会館」を設計した河内は演劇趣味があり、新劇の築地小劇場の参照にしばしば言及していたという（錦織亮雄への筆者によるインタビュー、2013年1月18日）。
59 軸を基準とする分散配置が後の丹下健三の設計する児童施設において「ストリート」の概念として応用されることになる。丹下健三による「ゆかり文化幼稚園」（1967）の説明によると、「ストリートと云うのは空間を規定していくための一つの軸となるもので・・・云わばネガティーブなコミュニケーションのコアと呼んでもよいものである」（『建築』、青銅社、1967年8月、p.30）。それはさらに、「東京聖心インターナショナル・スクール」（1968）（『建築文化』、彰国社、1970年10月、p.91）や「桐蔭学園女子部中学校・高等学校」（1985）

（『新建築』、新建築社、1985 年 9 月、p.170）でも応用されていることが言明される。
60 ロサンジェルス市の南加州広島県人会から広島市に委託された費用に市費を加えて建設された、「児童図書館」の設計は 1951 年から始め、1953 年に竣工している。
計画案はすでに 1950 年 10 月に『国際建築』において「平和公園計画」とともに公表されているが、平面的には正円形をしており、鉄筋コンクリート柱梁による構造で 2 階建であり、各階に読書室が設けられている。室内外を一体として使用するため 1 階読書室は折り畳み扉によって全面開放可能とすること、2 階の窓外側には回転可能な日射調節用の縦ブラインドを用いることが計画されていた。平面図からは、シンメトリーに近い壁の配置であることがわかる。2 階中央部分は、ハイサイドライトが採られ、中央に向けて屋根が勾配している。各階の高さは 1 階部分が 3.30m、2 階部分は 4.00m となっている。
それに対し、竣工した「児童図書館」の建物は計画案を踏襲しているが、資金難のための規模縮小が余儀なくされ、大きな変更が加えられている。すなわち、階数が 2 階建から 1 階建になっている点、平面的には計画時と同様円形の部分を持つが、円形内部に設けられていた事務的な室を円形外部に移動した点などが主な変更点である。また、これらの変更点に加えて、計画案の柱梁構造に対して竣工した児童図書館ではシェル構造が用いられている。これによって読書室には柱が落ちず、間仕切り壁がなくなることで、より視界が通り、走り回ることができる一体的な空間となっている。これらの変更は、総じて建築的ヴォリュームを押さえ、壁を廃して建物としての存在感を消そうとする試みであると考えられる。それは後に更に同じシェル構造の実験が試みられる「愛媛県会館」（1953）や「駿府会館」（1957）の比較的モニュメンタルな表現と比べても特殊である。
「児童図書館」の周辺整備については、建物の外周を前面のガラス張りにした設計であったが、丹下健三が計画していた周囲の植樹や空調などの設備が資金難のため進まず、夏の日差しによる暑さから市民の批判を浴びる結果となった（『広島新史　市民生活編』、前掲書及び『新修広島市史第四巻文化風俗史編』、前掲書参照）。「児童図書館」は 1978 年に老朽化のため解体される。1980 年には同じ場所に新築され、「広島市こども図書館」という名称となり、「広島市こども文化科学館」に併設され現在も運営を続けている。
61 出典：広島市都市整備局都市計画課蔵（広島都市生活研究会編、『広島被爆 40 年史　都市の復興』、広島市、1985、p.62）。
62 出典：筆者作成。
63 丹下健三、『復刻版　人間と建築　デザインおぼえがき』、彰国社、2011 年、p.69（引用文は 1955 年記）。
64 丹下健三、前掲書、pp.256-257（引用文は 1956 年 1 月記）。
65 1950 年代の所謂「伝統論争」はしかし、あくまで建築物の造形表現に関するものであり、丹下健三自身が陳列館や本館を日本建築における校倉造や伊勢神宮を参照していたことを述べても（丹下健三、「廣島計画（1946〜1953）」、前掲書参照）、藤森照信が厳島神社の配置構成との類似を指摘しても（藤森、「広島計画を展開した意図・その後の丹下氏の活動」、前掲書、p.55 参照）．本稿での建築理念的な論点とは直接的に関係しない。
66 この「平和の工場」の時間性は、したがって、陳列館・本館・公会堂のモニュメンタルな造形表現に還元されうる伝統への回帰ではない（川添登、「原爆時代への抵抗」、『現代建築を創るもの』、彰国社、1958、p.77 参照）。そしてさらにそれは、丹下健三において構想の過程のなかで徐々に生成していったと考えなければ、軸の眺望を閉ざすイサム・ノグチへの慰霊碑の制作依頼とその造形への信頼（丹下健三、「廣島計画（1946〜1953）」、前掲書参照）を説明することはできない。おそらく丹下健三は、イサム・ノグチという彫刻家との共同による「芸術の綜合」を観念し、公共空間を再定義しようとしていたのであり、それは 1957 年の「東京都庁舎」の市民ホールにおける岡本太郎との共同などに実現されていく（丹下健三、『復刻版　人間と建築　デザインおぼえがき』、前掲書、p.69 及び神代雄一郎、『現代建築と芸術』、彰国社、1958、pp.53-54 参照）。